

旅する縄文土器

— 北相木村坂上遺跡出土の阿玉台式土器 —

井出 浩正

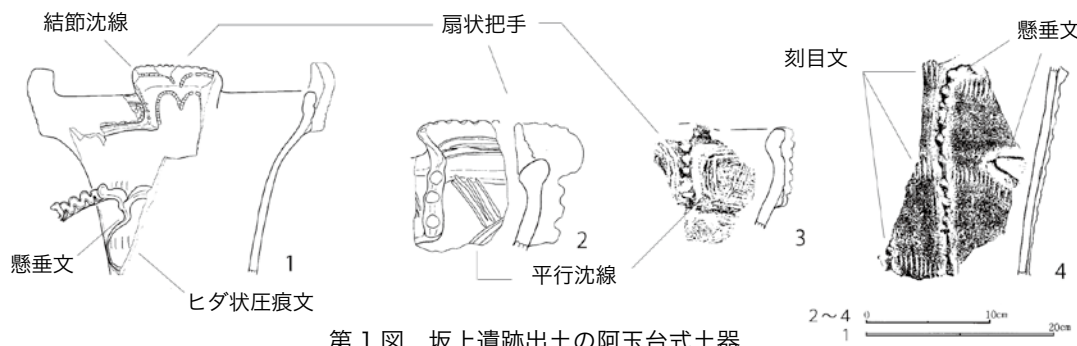
はじめに

本稿で取り上げるのは、北相木村坂上遺跡から出土した阿玉台式土器である。阿玉台式土器は、千葉県香取市（旧香取郡小見川町）阿玉台貝塚を標識遺跡とする縄文時代中期の土器型式である。主に東関東に分布し、西関東、北関東、南東北、中部高地、北陸の一部の遺跡から出土する（出土頻度は概ね列挙した順である）。長野県内では古くから茅野市長峯遺跡例が知られており、近年同遺跡の発掘調査において、よく似たほぼ完形の阿玉台式土器が発見され注目されたことは記憶に新しい（寺内 2005）。

縄文時代中期の中部高地は「縄文のビーナス」の愛称で著名な国宝土偶をはじめ、極めて装飾性の高い勝坂式土器や、千曲川流域で発見が相次いでいる焼町土器など、立体的な造形を特徴とする土器が知られている（第1表）。そうした地域に、はるばる東関東由来の阿玉台式土器がどのようなルートで、なぜもたらされたのか。本稿では県内（佐久地方）と県外（群馬県西部）からアプローチを試み、現段階で坂上遺跡出土の阿玉台式土器がどのような背景でもたらされたか考えてみたい。

1. 坂上遺跡出土の阿玉台式土器

坂上遺跡は南佐久郡北相木村坂上にあり、標高約1000メートルの相木川右岸の河岸段丘上に位置する。かつて八幡一郎は著書『南佐久郡の考古學的調査』で坂上遺跡に言及しており、同村の縄文時代遺跡として古くから知られている。遺跡前の村道を東にぶどう峠を越えると、群馬県上野村と接する県境に程近い山間の遺跡である。今回扱う阿玉台式土器は個人住宅建設に伴う発掘調査で出土した（第1図）。坂上遺跡全体か



第1図 坂上遺跡出土の阿玉台式土器

第1表 東信地域における縄文時代中期の様相（藤森 2012・2013 より作成）

東信 地域	他地域		井戸尻編年	新地平 編年	cal BC
	五領ヶ台Ⅰ式		九兵衛尾根Ⅰ式	1a~1b	3250-3490
東信系	五領ヶ台Ⅱ式		九兵衛尾根Ⅱ式	2	3490-3470
				3a~3b 4a~4b	3470-3250 3450-3430
後沖式	阿玉台Ⅰa式 阿玉台Ⅰb式	勝坂1式	猪沢式	5a 5b 5c	3430-3410 3410-3390 3390-3370
焼町 古段階	阿玉台Ⅱ式	勝坂1式	新道式	6a 6b	3370-3350 3350-3330
↓	阿玉台Ⅲ式	勝坂2式	藤内Ⅰ式	7a 7b	3370-3350 3350-3330
焼町 新段階		勝坂2式	藤内Ⅱ式	8a 8b	3270-3200 3200-3130
↓	阿玉台Ⅳ式	勝坂3式	井戸尻Ⅰ式	9a 9b 9c	3130-3050 3050-2970 2970-2950
↓		勝坂3式	井戸尻Ⅲ式		
↓	加曾利Ⅰ式／曾利Ⅰ式		曾利Ⅰ	10a	2950-2920

ら比べると部分的な調査である。

図示した阿玉台式土器はいずれも遺構に伴わない包含層出土である。1、2、3は深鉢形土器の口縁部、4は胴部破片である。1、2、3はいずれも阿玉台式土器の特徴の一つである扇状把手を有しており、隆線脇に結節沈線が施されるもの（1）、平行沈線が施されるもの（2・3）がある。また胴部にはヒダ状圧痕文（1）、それが簡略化されたと考えられる刻目文（4）が認められる。1は阿玉台Ⅰb式、2、3は阿玉台Ⅱ式に比定される。4は刻目が横方向に施され、隆線による懸垂文が縦位や一部蛇行状に施されている。刻目は貝殻の復縁を押し当てて文様が描かれた可能性がある。文様や文様要素から阿玉台Ⅰb式～同Ⅱ式と考えられる⁽¹⁾（第2表を参照）。なお、これらの深鉢以外に、浅鉢や粗製の土器⁽²⁾は確認されていない。

2. 隣接地域の阿玉台式土器：佐久地方

坂上遺跡出土の阿玉台式土器がどこに由来するのか。まず、坂上遺跡の周辺地域について、地形上のまとまりとして捉えやすい千曲川上流域の佐久地方から出土している阿玉台式土器を概観する⁽³⁾（第2図）。

佐久地方の阿玉台式土器は、阿玉台Ⅰa式（17、18、20）から同Ⅲ式（15？、16）までが出土しており、阿玉台Ⅰb式と同Ⅱ式土器が出土の多くを占めているといえる。器形が分かる復元個体をみても、山形波状（1、

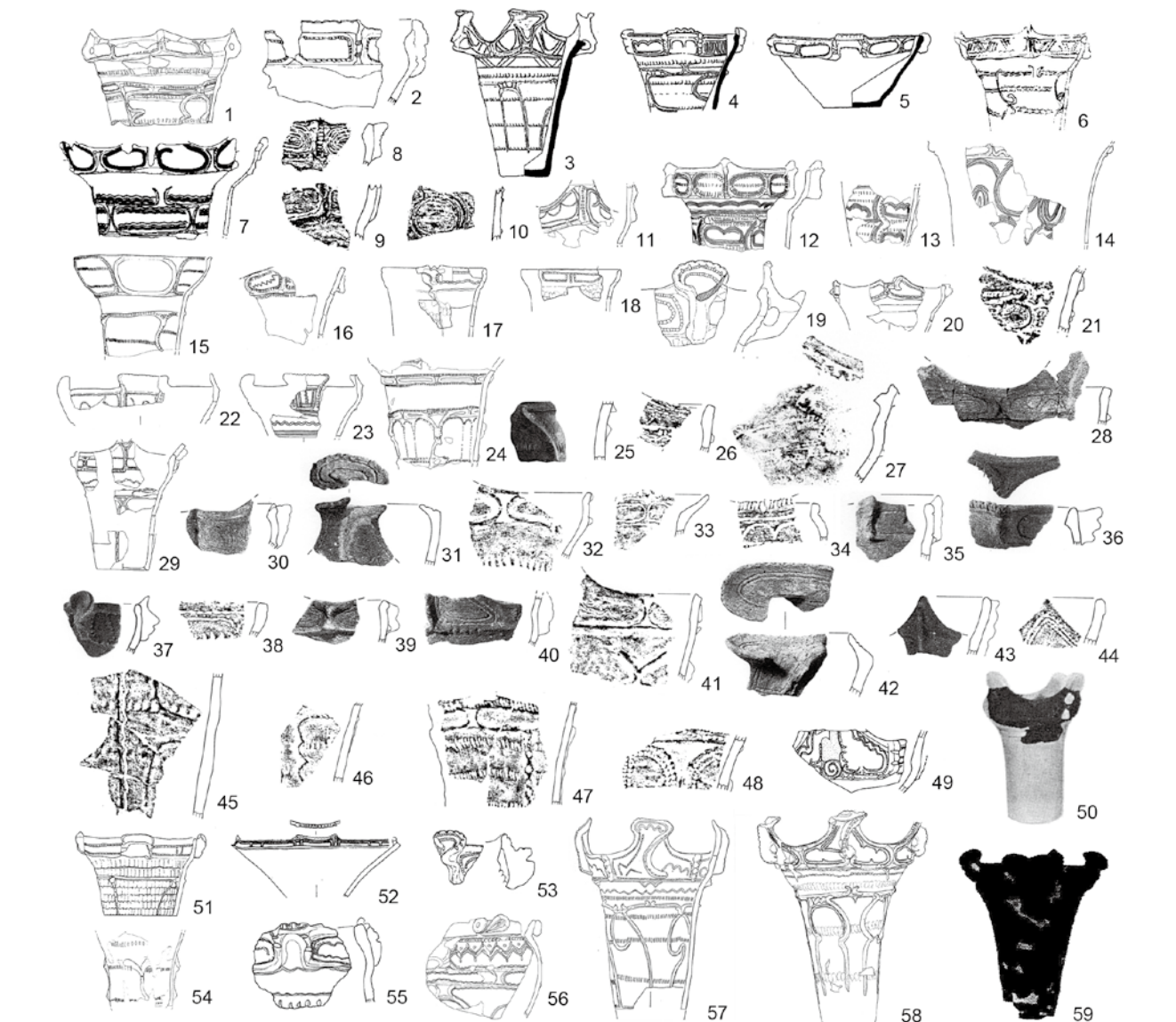
第2表 阿玉台式土器の主な属性（井出 2005）

土器型式/属性	彫刻文	角押文	沈線文	製作痕（輪積み痕）	ヒダ状圧痕文	刻目文	爪形文	縄文	無文	雲母	砂粒	石英粒
雷八類（阿玉台直前）	○	△	○	○				○	○	△	◎	
Ⅰa式	○	○（単列）	○	○				×	○	○	◎	
Ⅰb式		○（単独化）	○	○	○	○			○	○	◎	
Ⅱ式		○（複列化）	○			○	○	○（細い条）	○	◎		○
Ⅲ式		○	○				○	○	○	◎		◎
Ⅳ式			○					◎	△	○		◎

3、6、7、11、12、28、29、31、39～42、49、50）や扇状把手（2、4、22、23、36、51、55）平縁（19、37、53）の深鉢形土器が主体であり、文様構成、文様要素も東関東の阿玉台式土器に共通する点が多いといえる。油田遺跡（上田市）や上ノ段遺跡第4号住居址（長和町）からは阿玉台Ⅰb式に比定される扇状把手を有する浅鉢が出土している（5、52）。後述するように、東関東でも出土例が少なく注目したい。

遺構出土では勝坂式土器や焼町土器、いわゆる斜行沈線文土器などに客体的に共伴しているのが特徴であ

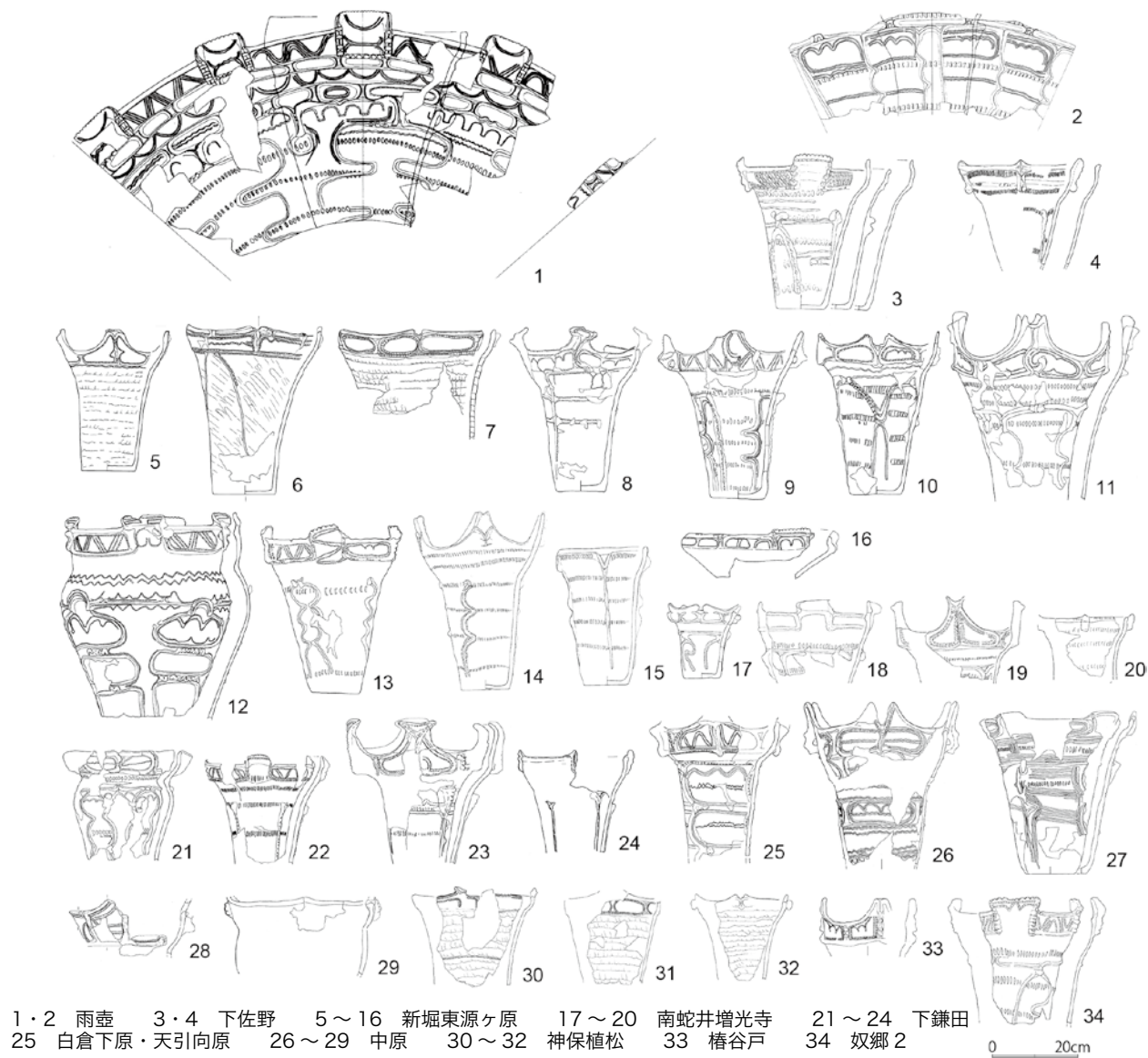
る。川原田遺跡（御代田町）J-20号住居址やJ-50号住居址、上吹上遺跡（佐久市）第6号住居址、上ノ段遺跡第4号住居址において、阿玉台式土器が住居内の炉体土器として検出されている（12、15、51、52）。上吹上遺跡では阿玉台式土器のほかに猪沢期の深鉢が密着した状態で炉体土器として出土している（51）。阿玉台式土器が炉体土器として用いられる例は少なく、特に阿玉台式土器が主体となる東関東では住居跡は地床炉もしくは炉跡が検出されないことが多い。一方、勝坂式期の住居跡からは、地床炉、添石炉、石囲炉、埋



1 八千原 2 真光寺 3～5 油田 6・7 久保在家 8～10 滝沢 11～16 川原田 17～19 大星尻 20～48 寄山 49 砂原 50 後沖 51 上吹上 52 上ノ段 53・54 明神原 55・56 滝 57・58 長峯 59 中ッ原

※ 縮尺：復元個体は 1/16 復元個体（写真）は不明 破片（拓本・写真）は 1/8

第2図 佐久地方を中心とする阿玉台式土器



第3図 群馬県西部の阿玉台式土器

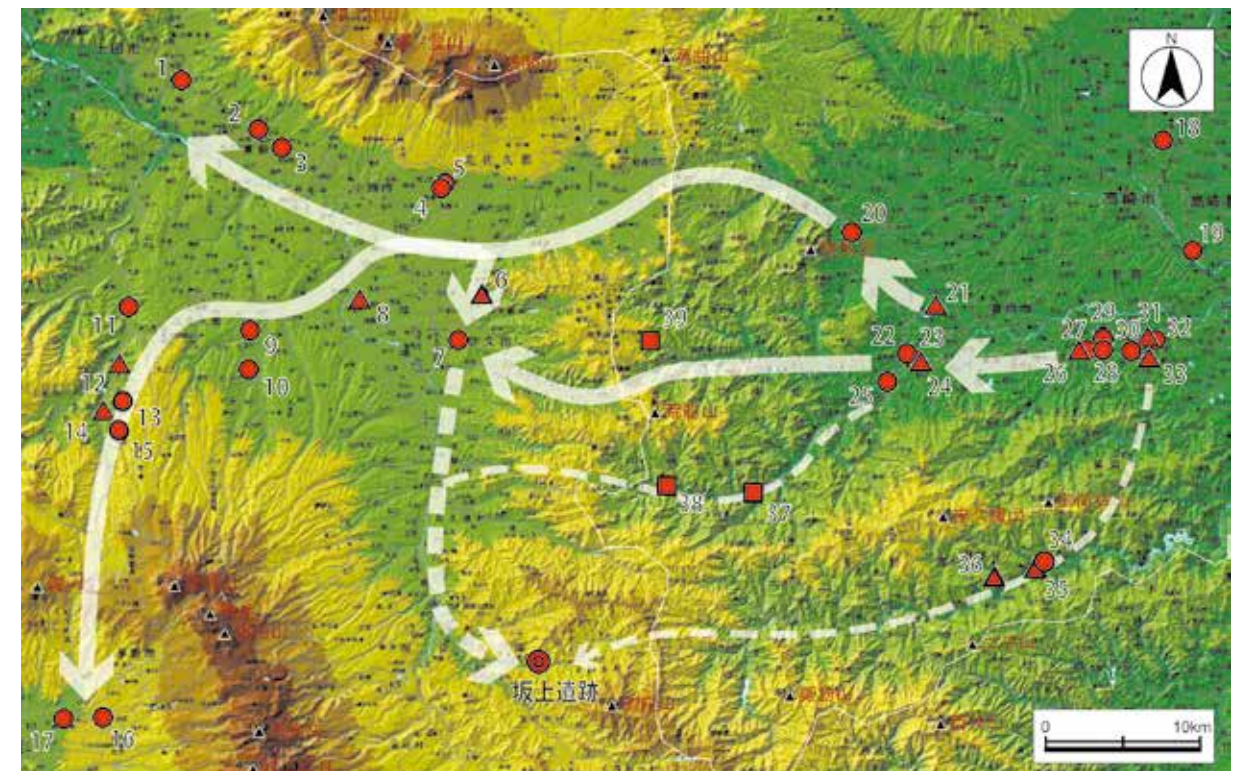
甕炉、石囲埋甕炉などさまざまな形態の炉跡が検出される。すなわち、そもそも住居跡の炉体土器に阿玉台式土器が使用されていたこと自体が稀少例であるばかりか、この地域にとって客体的な存在の阿玉台式土器が住居跡の炉に選択的に使用されているという現象が指摘できるのである。

3. 隣接地域の阿玉台式土器：群馬県西部

次に、群馬県西部を対象に阿玉台式土器を抽出する。安中市、富岡町、上野村、南牧村、神流町、高崎市などの佐久地方に隣接する、あるいは近接する群馬県西部県境を主に対象とした⁽⁴⁾。地域によっては調査事例が少ないため、現段階での傾向として捉えておきたい。当該地方では、新堀東源ヶ原遺跡(安中市)、南蛇井増光寺遺跡(富岡市)、下鎌田遺跡(下仁田町)が大きな集落跡といえる。南蛇井増光寺遺跡と下鎌田遺跡は指呼の距離にあり、新堀東源ヶ原遺跡もこの2遺跡と同じ丘陵沿いに位置する。いずれも上信越自動車道の建設

に伴う発掘調査のため、集落全体に及ばない部分的な調査となっている遺跡もあるが、住居跡や土坑から多数の阿玉台式土器が出土しており、当該期の拠点的な集落と考えられる。佐久地方のすぐ東隣に阿玉台式期を主体とする遺跡群があることは注目すべきである。

この地域の阿玉台式土器は阿玉台Ⅰa式から阿玉台Ⅱ式まで出土している(第3図)。他地域と同様に阿玉台Ⅱ式土器をピークとしながらも、阿玉台Ⅲ式土器以降は皆無に近いといえる。阿玉台Ⅰa式が一定量存在し、土坑内で異系統土器と共伴する事例が多く認められる(5～7、30～32)。当地域における阿玉台式土器のあり方を考える上で重要であろう。阿玉台Ⅰb式から阿玉台Ⅱ式は、山形波状(8～11、17、19、23、25、26、28、33)や扇状把手(1、3、12、13、18、27、34)や平縁(21)を有する深鉢、浅鉢(16)、粗製の深鉢(4、14、15、20、24、29)など、利根川下流域をはじめ、阿玉台式土器が主体となる地域に共通する土器組成を有している。阿玉台式土器を使用した集団が、ある程度の時間幅において伝統的に居住し



1.八千原 2.真行寺・油田 3.久保在家 4.滝沢 5.川原田 6.大星尻 7.寄山 8.砂原 9.上吹上 10.後沖 11.上ノ段
12.大仁反 13.明神原 14.浦沖 15.滝 16.長峯 17.中ツ原 18.雨壺 19.下佐野 20.新堀東源ヶ原 21.高田城址
22.南蛇井増光寺 23.下鎌田 24.袖瀬Ⅰ 25.米山 26.天神Ⅰ 27.白倉下原・天引向原 28.長根安坪 29.中原 30.神保植松
31.川内 32.椿谷戸 33.多比良笠掛 34.奴郷2 35.黒田 36.船子元船子 37.田ノ平 38.勸能 39.荒船風穴蚕種貯蔵所跡
●遺構を伴う出土遺跡 ▲遺構を伴わない出土遺跡 ■中期の土器が出土した遺跡

第4図 群馬県西部から佐久地方を中心とする阿玉台式土器の流入ルート
(カシミール3Dにより作成)

ていたことが窺えよう。新堀東源ヶ原遺跡の遺構外出土で扇状把手を有する浅鉢が出土している(16)。阿玉台式土器の分布圏内においても扇状把手を有する浅鉢出土例が少ないが、そうした中で、本例や油田遺跡例、上ノ段遺跡例などが点在していることが特筆される。

遺構出土例では、雨壺遺跡(高崎市)62号住居跡から阿玉台Ⅱ式土器の大形の胴部破片が炉体土器として検出されている。既述の川原田遺跡や上吹上遺跡、上ノ段遺跡など、佐久地方との関わりが窺えよう。住居跡出土では、新堀東源ヶ原遺跡、南蛇井増光寺遺跡や下鎌田遺跡から略完形や大形破片がまとまって出土している。小破片の住居跡や土坑出土を含めると、白倉下原・天引向原遺跡(甘楽町)や椿谷戸遺跡(高崎市)、中原遺跡(高崎市)、神保植松遺跡(高崎市)などがあり、さらに遺構外出土破片を含めると周辺に密集している。奴郷2遺跡(神流町)では1号住居跡から阿玉台Ⅰb式土器が出土し、炉内から斜行沈線文土器が検出されている。直線距離では坂上遺跡に最も近い群馬県境の遺跡のひとつといえる。

かつて茅野市長峯遺跡出土の阿玉台式Ⅰb式土器(第2図57、58)について、寺内隆夫は群馬県西部をその故地と推測した(寺内 前述)。その論拠の一つとして長峯遺跡出土の阿玉台式Ⅰb式土器の「R」や反転「R」字状、逆「し」状などの胴部懸垂文が挙げられる。寺内は、これらの懸垂文は同時期の佐久地方に分布する

いわゆる後沖式土器の胴部懸垂文の模倣ないし影響を受けたものと考えており、こうした懸垂文を介在させることによって、長峯遺跡出土の阿玉台式土器の故地が群馬県西部に求められると考えたのである。今回取り上げた奴郷2遺跡では胴下半部を欠いているものの、「R」字状の懸垂文が施されており、また南蛇井増光寺遺跡においても小形の深鉢ではあるが「R」字状の懸垂文が施されている。長峯遺跡出土事例の故地を考える上でも、またそれを含む佐久地方の阿玉台式土器のあり方を考える上でもこの2例は興味深い事例といえる。

4. 坂上遺跡出土の阿玉台式土器はどこからもたらされたか？

前節までをまとめると、以下を抽出できる。

①佐久地方に近接する群馬県西部県境において、新堀東源ヶ原遺跡や南蛇井増光寺遺跡、下鎌田遺跡を中心とする集落跡の住居跡や土坑からまとまった阿玉台式土器が出土していること、さらに深鉢、浅鉢、粗製の土器が出土することから、これらの集落跡には阿玉台式土器を作り、使用する集団が存在したことが窺える。これらの集落跡の存在は、当該地域が単に長野県内に分布する阿玉台式土器の一時的な流入路としてではなく、むしろ長野県内に持ち込まれた阿玉台式土器の供給源的な存在であった可能性

が高いといえよう。

②寺内が指摘する「R」字状や逆「し」状の胴部懸垂文を有する阿玉台式土器が群馬県西部県境に広く認められることから、東信地方を中心とする後沖式土器との型式学的な交流が推測される。

③客体的な存在でありながらも阿玉台式土器が炉体土器として特徴的に使用されている事例が川原田遺跡、上吹上遺跡、上ノ段遺跡などで認められ雨壺遺跡例との関わりが窺えること、また扇状把手を有する浅鉢が新堀東源ヶ原遺跡と上ノ段遺跡から出土していることを考えると、佐久地域と群馬県西部県境とのヒト、モノの往来が推定される。

以上を踏まえ、やや強引だが群馬県西部県境から長野県内への阿玉台式土器の流入路を考えてみたい（第4図）。ひとつは、新堀東源ヶ原遺跡を拠点とした碓氷峠越えである。浅間山の稜線に沿って西進すると川原田遺跡や滝沢遺跡（御代田町）などがあり、さらに北西に進むと久保在家遺跡（東御市）や油田遺跡などの千曲川中流域の遺跡群へ接続する。また川原田遺跡から南西に進むと上吹上遺跡や後沖遺跡（佐久市）など蓼科山麓周辺の遺跡があり、さらに西に進むと上小地域を結ぶ依田川沿いに上ノ段遺跡がある。一方、上ノ段遺跡から南に蓼科山方向に進むと、大門川沿いに焼町土器の拠点的な集落である明神原遺跡（長和町）や滝遺跡（同左）などがあり、大門峠を越えると冒頭で紹介した長峯遺跡（茅野市）に到達する。長峯遺跡出土の阿玉台式土器の搬入ルートとして想定されうるだろう。

では、坂上遺跡出土の阿玉台式土器は一体どこからもたらされたのだろうか。筆者は南蛇井増光寺遺跡や下鎌田遺跡がある下仁田町や富岡市から鐺川に沿って西へ進んだルートが一つの有力な候補ではないか、と考えている。これは現在の国道254号線にほぼ重なる。⁽⁵⁾ 下仁田町から佐久地方へ抜けると寄山遺跡群があり、寄山遺跡群を経由して千曲川流を上流に遡って坂上遺跡に到達した可能性がある。一方、関東山地を縫うように名もなき峠を越えて坂上遺跡に到達した可能性もある。奴郷2遺跡をはじめ、神流町には阿玉台式土器が出土する遺跡の存在が指摘されており、未見の遺跡が存在する可能性を十分考慮に入れる必要がある。南牧村や上野村では縄文時代中期の遺跡が点在するため、阿玉台式土器がもたらされた可能性もあろう。いずれにせよ、群馬県西部の県境を東から西に越えて、坂上遺跡に阿玉台式土器がもたらされた可能性が高いと考える。

おわりに

本稿では坂上遺跡出土の阿玉台式土器を端緒に、佐久地方で出土する阿玉台式土器の故地とそのルートを検討した。もう15年以上前、坂上遺跡出土の阿玉台式土器の資料見学のため北相木村考古博物館に伺った際、利根川下流域など東関東に分布の中心がある阿玉台式土器がなぜ山間のこの遺跡にあるのか、奇妙に思

えたことを覚えている。しかし、先学を踏まえ、資料の集成と吟味によって、必ずしも直接東関東から持ち込まれたわけではなく、佐久地方と接する群馬県西部県境に供給源がある可能性を窺えるに至った。坂上遺跡出土の阿玉台式土器の存在は、もはや不可思議でも特異な事例でもなく、地理的にも当時の文化背景においても合点のゆく、縄文時代中期におけるヒト、モノの交流のあり方を示す貴重な証拠なのである。

（註）

- (1) 阿玉台式土器は西村正衛による利根川下流域の貝塚群の層位的な発掘調査によって、阿玉台式土器の編年が示されている
- (2) 筆者は文様要素のみ、または口縁部から懸垂文が施されるのみ深鉢を疎文系土器と呼び、粗製のな性格を推定している（井出2008を参照）
- (3) 佐久地方を含めた長野県内を中心とする阿玉台式土器については、『聖石遺跡・長峯遺跡（別田沢遺跡）』中で寺内隆夫が概要をまとめている（寺内2005）
- (4) 群馬県内の阿玉台式土器は、赤城山南麓を中心とする利根川上流域に大きな遺跡群があり、本稿で扱う群馬県西部の阿玉台式土器も大きな意味でそのグループに入ると思われる
- (5) 阿玉台式土器の出土ではないものの、下仁田町の国指定史跡荒船・東谷風穴蚕種貯蔵所跡の整備に伴う調査において、史跡内の岩陰遺跡から勝坂式土器と焼町土器が発見された。原位置かどうかは不明であるが、阿玉台式土器とほぼ並行する時期の活動痕跡として興味深い事例である

発掘調査報告書

北相木村教育委員会 2000『坂上遺跡』
群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・日本道路公団 1994『白倉下原・天引向原遺跡Ⅱ』
群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・日本道路公団 1997『神保植松遺跡』
群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・日本道路公団 1997『南蛇井増光寺遺跡Ⅵ』
群馬県多野郡吉井町教育委員会 1989『椿谷戸遺跡発掘調査報告書』
群馬県多野郡吉井町教育委員会 2004『長根遺跡群発掘調査報告書Ⅶ』
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984『熊野堂遺跡第Ⅲ地区 雨壺遺跡』
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989『下佐野遺跡』
山武考古学研究所 1998『奴郷2遺跡』
下仁田町教育委員会 2012『荒船風穴蚕種貯蔵所跡調査報告書Ⅰ』
小県郡東部町教育委員会 1982『真行寺』
東信土地改良事務所・望月町教育委員会 1983『後沖遺跡』
長門町教育委員会 2001『明神原・桑木原遺跡』
長門町教育委員会 2001『滝遺跡』
長野県土地開発公社・佐久市教育委員会 1995『寄山・寄山古墳・中条峯・勝負沢』

長野県御代田町教育委員会 1997『滝沢遺跡』
長野県御代田町教育委員会 1997『川原田遺跡』
日本鉄道建設公団北陸新幹線建設局・長野県教育委員会・(財)長野県埋蔵文化財調査センター 1998「第13章砂原遺跡」『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』
日本道路公団・群馬県教育委員会・松井田町遺跡調査会 1997『新堀東源ヶ原遺跡』
日本道路公団・群馬県教育委員会・下仁田町遺跡調査会 1997『下鎌田遺跡』
日本道路公団東京第二建設局・長野県教育委員会・(財)長野県埋蔵文化財センター 1991「第11節大星尻古墳群」『上信越自動車道埋蔵文化財調査報告書2』
望月町教育委員会 1990『上吹上遺跡』

【論文等】

井出浩正 2005「佐久地方の阿玉台式土器について」『佐久考古通信』（No.91）佐久考古学会
井出浩正 2008「常総における阿玉台式土器Ⅱ式土器の様相」『生産の考古学Ⅱ』同成社
井出浩正 2012「長野県内における阿玉台式土器の様相―群馬県西部の阿玉台式土器との比較から―」『長野県考古学会誌』（143・144合併号）長野県考古学会
上田市立博物館 1979『郷土の歴史 原始・古代文化』
佐久市志編纂委員会 1996『佐久市志 歴史編（一）原始古代』
新編長門町誌編纂委員会 1989「第二編 町の歴史」『新編長門町誌』

寺内隆夫 1996「斜行沈線文を多用する土器群の研究―『後沖式土器』設定は可能か？―」『長野県の考古学』（(財)長野県埋蔵文化財センター研究論集Ⅰ）(財)長野県埋蔵文化財センター
寺内隆夫 2005「第6章まとめ（6）遠隔地域の土器―長峯遺跡出土の阿玉台式土器について―」『聖石遺跡・長峯遺跡（別田沢遺跡）』長野県諏訪地方事務所・長野県諏訪建設事務所・長野県茅野市・長野県埋蔵文化財センター
長野県南佐久郡誌編纂委員会 1998『南佐久郡誌 考古編』
南牧村誌編さん委員会 1981『南牧村誌』
西村正衛 1984『石器時代における利根川下流域の研究―貝塚を中心として―』早稲田大学出版部
藤森英二 2012「長野・山梨両県の中期土器編年について―現状と課題―」『長野県考古学会誌』（143・144合併号）長野県考古学会
藤森英二 2013「東信地域における縄文時代中期土器の動態」『日本考古学協会2013年度長野大会研究発表資料集 文化の十字路信州』日本考古学協会2013年度長野大会実行委員会
万場町誌編さん委員会 1995『万場町誌』
八幡一郎 1928『南佐久郡の考古學的調査』岡書院
※紙数の都合、主要なものに限らせていただいた。ご容赦願いたい

北相木村考古学ニュース

栃原岩陰遺跡の土器からマメ類の圧痕

平成29年2月、明治大学黒耀石研究センターと土器種実圧痕研究グループの調査により、栃原岩陰遺跡出土の縄文早期土器から、マメ類の種子圧痕が発見されました。



放射性炭素年代測定でおよそ10,800年前とされ、ダイズ属と思われる種子圧痕が発見された燃糸文土器。左上の小さな穴が種子圧痕。

栃原岩陰遺跡出土の縄文時代早期の土器片から、マメ科に属する種子の圧痕が発見されました。圧痕というのは、土器の表面にみられる小さな孔などを指し、これにシリコンゴムを流し込んで顕微鏡などで観察することを「圧痕レプリカ法」と呼びます。近年はこの方法により、縄文時代にマメ類（アズキやダイズの仲間）、シソ（エゴマ）など、食料にすることの出来る植物の種子が、彼らの身近にあったことが分かってきました。

北相木村教育委員会では、現在栃原岩陰遺跡の遺物整理作業を行っていますが、この度「明治大学黒耀石研究センター」と「土器種実圧痕研究グループ」の調査により、全部で6点のマメ類の種子圧痕が見つかり、そのうち2点はアズキ亜属とダイズ属であると分かりました。

土器はいずれも縄文時代早期のはじめ頃（およそ11,000～10,000年前）のものと思われ、現在全国各地で見つかっているマメの圧痕としてもかなり古いものと予想されます。今後の縄文時代研究でも注目されていくことでしょう。